

橋の役割 ― 景観を創る ―

NEXCO 西日本コンサルタンツ(株) フェロー会員 坂手 道明

構造物の役割

自然空間、あるいは人工の都市空間に構築する構造物、道路、鉄道、建物、さらにはモニュメント、古くはスフィンクスやピラミッドなどは、すべて空間を造形する要素である。

写真-1は、ガール橋、写真-2はゼベリン橋であるが、前者が南仏ニームのガール渓谷の自然空間を造形する大きな要素となっており、後者は、ゴシック建築の代表とも言える、ケルン大聖堂の尖塔が創っている街の景観を、さらにひき立たせる役割を担っている。¹⁾



写真-1 Pont du Gard (ガール橋), Nîmes, フランス
(撮影: 著者, 1980 年)



写真-2 Severing Bridge (ゼベリン橋), Köln, ドイツ
(撮影: 著者, 1980 年)

一方、1つの構造物が主張をしすぎ、景観を壊す、または他の構造物の役割をなし崩しにしている例もある。

写真-3は、「平和都市広島」のシンボルである平和公園にアプローチする橋。(イサム・ノグチのデザイン)で、平和公園の入口的存在である。

写真-4は、正に平和公園のシンボル、祈りの場、“原爆慰霊碑”である。

これもイサム・ノグチの作品であり、慰霊碑に納められた原爆死没者の過去帳の向うに原爆ドームが見えるというコンセプトであろうが、左手奥のビルがこのデザインを台無しにしている。



写真-3 平和大橋, 広島市 (撮影: 著者, 2006 年)



写真-4 原爆慰霊碑, 広島市平和公園 (撮影: 筆者, 2019 年)

橋の役割

橋は、物あるいは人を渡すという当然の機能に加え、景観を創るという役割を担う。言うなれば、使用機能と景観的機能を有する。「橋の美意識とその本質」の中では「端的にいつて橋は、その効用的価値と、美的価値の二つを持つ」と述べている。²⁾



写真-5 スイス Kressehn
(撮影: 筆者, 1997 年)

橋は、周囲の自然あるいは人工の構造の中で見られるものであり、周囲景観を借景として美的判断がなされると同時に、架設された途端に景観を構成する要素となる。

篠原修は、「造景」の中で「なる」風景と「つくる」風景と言っている。³⁾

写真-5は、スイスの Kressehn の村で見掛けした木橋である。

生活の中で小川を渡るという必要な機能を果たし、雰囲気には溶け込んでおり、「なる」風景であろう。

キーワード Bridge and Scenery , 景観

連絡先 〒733-0037 広島市西区西観音町 17 番 17 号 NEXCO 西日本コンサルタンツ(株) TEL082 - 532 - 5120

一方で、使用機能を優先したため、都市の良い景観を創るという点では、成功とは言えない例もある。



写真-6 旭橋 広島市 (撮影: 筆者, 2019 年)

写真-6 は、広島市の太田川に架かる旭橋である。

写真手前の 3 径間のアーチ橋は、1960 年に完成し、力強くダイナミックなフォルムは、広島の名橋の 1 つであった。

しかし、その後の急激な交通の増大により、この橋が国道 2 号線の慢性的な渋滞箇所となり、下流側にダブルデッキのトラス橋が架けられた。このトラス橋のお陰で、渋滞は解消され、車を「さばく」という機能は十分に果たしているが、残念な気がする。

余談ではあるが、このトラス橋を設計された、私もずっと敬愛して止まない S 博士が、「同じアーチを並行して架けたかった」と悔やまれていた事を鮮明に憶えている。

アーチ橋単独の姿を今見る事は出来ないが、「広島百橋」⁴⁾に絵で紹介されている。この中で、筆者は「川下に二



写真(絵)-7 旭橋 (「広島百橋」より転載)

ケルン・ドイツ橋は、第二次大戦で破壊された旧吊橋の橋脚を利用して架けられた鋼箱桁橋を、交通量の増大に対応するため拡張することになり、隣接して PC 橋を建設している。

写真-8 に見られるように、先に架けられた鋼橋とぴったり合うよう、桁高はもとより、鋼橋の垂直補剛材、下フランジのイメージに合わせ、ウェブの外側に垂直リブと下フランジの張出しを付けている。この形状により、鋼橋とコンクリート橋が視覚的に違和感の無いものになっている。⁵⁾

人の役割

以上、橋と景観との関係を述べた。大変僭越である事は承知の上で、良くないと思う事例も挙げた。もちろん、私の個人的な見方であり異論もあろう。

一方で、橋の計画、設計、施工に携わる人間は、使用性、安全性、耐久性等の物理的機能に加え、見え方は必ず「意識」するはずである。この「意識」に対して意図した方向とは異なる結果になったものも少なからず有る。前項で挙げた旭橋も、S 博士は相当強い意識をお持ちだったようだが、実現できなかった。

景観に対する価値を評価する意識を形成する努力が求められる。

難波喬司氏は「意識、心の持ち方という、人々の内面に働きかけ、行動変化を促すことができる社会システムが必要である。」と述べている。

参考文献：1) 坂手：橋梁と基礎，Vol.46, No.2, pp26～30(2012.2)

2) 橋の景観とその形態および色彩に関する小委員会：美しい橋のデザインマニュアル，pp.3, 土木学会, (1982.6)

3) 磯崎新他：造景 No.2 (特集：風景をつくる橋)，pp48～56, 86～89, (株)建築資材研究社(1996.4)

4) 四国五郎：広島百橋，pp134,135(1975.4)

5) フリッツ・レオンハルト：ブリュッケン(BRÜCKEN), pp155～156

6) 難波喬司：景観づくりにおける水平的協働：土木学会誌，Vol.103 No.12 pp65(2018.12)



(a) コンクリート(新橋)側から



(b) 鋼橋(旧橋)側から



(c) 下面

写真-8 Köln・Deutz Bridge (ケルン・ドイツ橋)
(写真提供: 松川耕治氏)